



川場村役場新庁舎が完成しました

川場村 むらづくり振興課 拠点構想推進係

■ 川場ベースとは

川場村では、三世代先を見据えた意思決定の仕組みとして「川場村100年憲章」を策定しました。

そこでは、滞留・交流人口の維持、増加を図りながら、老朽化した村施設の更新を行うとともに、災害・有事への備えを行うことが謳われています。こうした理念を具体的な将来像へと繋げるべく、持続的な経済・文化発展の基盤をつくることを目標とした新拠点構想が生まれました。



kawaba Base(川場ベース)

今回の整備は、役場庁舎を中心にむらの学習館、交流ホール、エネルギーセンター、防災倉庫が連絡ブリッジによってつながっています。

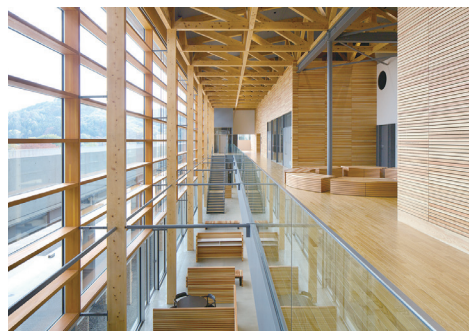
拠点施設は、これからの村の中心となるという意味を込めて「kawaba Base(川場ベース)」と名付けられました。これらの施設が村内外の人々に親しまれ、未永く愛される施設となることを期待しています。

■ 川場村の森林資源の活用

川場村は、村の面積の約86%を山林が占めています。

そのため新しい庁舎では、林業を産業とする村のイメージを可視化する意味でも、構造材や外壁などに豊富な森林資源を活用すべく、地元産木材を積極的に利用しています。

川場村が保有している「村有林」で特徴的なものが、明治43年に創設され100年以上にわたって村民によって守られ続けている「学校林」です。昔から下草刈りなどの手入れを村の子どもたちの奉仕活動として実施し、伝統行事として今も引き継がれています。川場ベースでは、これら村有林の木材を伐採し、内外装に利用しています。



ホワイエ(庁舎2F)

■ 自然エネルギーの取り組み

新たな拠点となる庁舎をはじめとする各施設の使用に合わせて、高効率・省電力設備機器の採用等を考慮した計画であることはもちろんですが、自然通風や自然採光を取り入るなど積極的に自然エネルギーの活用も図っており、さらに、木チップを燃料とする木質バイオマスボイラーと太陽光発電などの再生可能エネルギーも採用しています。木質バイオマスボイラーは、空調熱源として冷房時は温水焚吸収式冷温水器を介して冷水を供給、暖房時は温水を直接利用することで年間を通じた運用を行っています。



木質バイオマスボイラー本体内部

拠点施設の屋根等には合計204枚の太陽光パネルが設置されており、日常的に施設で利用するほか、蓄電池を備えていることで災害時の利用も可能となっています。

災害の長期化に対する水源の確保を目的として、屋根雨水の集水による雑用水(トイレの洗浄水)利用も行っています。むらの学習館地下ピットに設けた雨水貯留槽及び濃過装置を介して雑用水槽に貯水し、停電時にも運転が可能なポンプを利用して、各施設へ送られています。

■ 新庁舎の落成式

新庁舎の完成に伴い、役場新庁舎落成式が令和5年10月29日に開催され、会場となった交流ホールには国会議員を含む関係者約250名が集まりました。式典を盛り上げる川場キッズ(川場小学校の生徒)のバンド演奏やバルーンリリース等、村民も参加して盛大にイベントを実施しました。

今後は、川場ベースを拠点として、様々なイベントや催し物を企画・実施し、村の活性化とにぎわいを創出すると共に、能率的な行政を推進し産業・文化の発展と村民の福祉向上に専念していきます。

